

7 国際交流

進捗状況報告

○基礎的な状況を継続的に観測する指標				公開/非公開	全学的な視点	個別的な視点	単位	2004	2005	2006	2007	2008	備考
指標1	国際交流協定締結機関数			公開	○	△	機関	—	51	67	82	85	
指標2	国際交流協定締結国数			公開	○	△	国	—	19	21	21	23	
指標3	海外からの学生の受け入れ	国 数		公開	○	△	国	10	9	12	11		
		外国人留学生	正規	公開	○	○	人	328	358	391	404		
			交換	公開	○	○	人	40	56	79	89		
		外国人留学生在籍学生比率	正規	公開	○	○	%	1.8	1.9	2.0	2.0		外国人留学生÷在籍学生数
			交換	公開	○	○	%	0.2	0.4	0.4	0.4		
その他 (セミナー等による受け入れ)			公開	○	△	人	26	17	28	18			
指標4	海外への学生の派遣	国 数		公開	○	△	国	14	14	13	15		
		人 数	長期	公開	○	○	人	128	139	119	160		
			短期	公開	○	○	人	237	195	207	249		
		在籍学生比率	長期	公開	○	○	%	0.7	0.7	0.6	0.8		海外へ派遣した学生数÷在籍学生数
			短期	公開	○	○	%	1.3	1.0	1.1	1.2		
指標5	人的国際学術研究交流 (受け入れ教員数)	長期	公開	○	○	人	4	4	1	8			
		短期	公開	○	○	人	19	21	30	16			
指標6	人的国際学術研究交流 (派遣教員数)	長期	公開	○	○	人	9	11	8	8			
		短期	公開	○	○	人	450	455	403	375			
○施策の目標の達成度を測る指標				公開/非公開	全学的な視点	個別的な視点	単位	2004	2005	2006	2007	2008	備考
指標7	国連ボランティア(UNV)の参加者数			公開	○	△	人	8	12	10	10		
<p>注)全学的な視点、個別的な視点について 全学的な視点とは国際教育協力センターの進捗状況報告シートに表示される項目 個別的な視点とは各学部の進捗状況報告シートに表示される項目</p> <p>注)正規、交換について 正規とは学位取得目的(大学院生は特別学生を含む)。交換は正規以外で大学院短期留学を含む</p> <p>注)長期、短期について 指標4:1学期以上を「長期」とし、1学期未満を「短期」とする。 指標5・6:1年間以上を「長期」とし、1年間未満を「短期」とする。</p> <p>注)指標3・4・5・6について 学部、研究科、センター等を合計した人数とする。</p>													

交流協定関係では3大学1連合体と新たに締結し、1大学と解消した。その中で、ポーランドの大学と新たに交流することになった。
 宿舎確保の検討は、継続して行っているが、新たに滞在先での火災等の対応を加えて検討を行なう。
 客員教授制度の検討を継続して行なう。

2～3月の期間での新規プログラムは、オーストラリアで英語研修プログラムを2009年に実施できる見通しとなった。
 「異文化理解」プログラムとして、2007年度より「留学生ウィーク」の名称で、留学生と日本人学生の相互理解を深めるプログラムを開始した。

2008年3月に国連ボランティア計画(UNV)と協定更新を行ない、派遣分野を従来の国連情報技術サービス(UNITes)から教育、衛生など加えて拡大し、名称も国連学生ボランティアと改めた。また、新たな協定期間内(～2011年)に、国連学生ボランティア派遣の国内拠点を担うことが加わった。

学内第三者評価の評価結果を受けての追加記述

人的国際学術研究交流が停滞している原因はいくつかある。現在の客員教員招聘制度は、学部所属する教員からの推薦により各学内での調整の後、学部長会で選考・決定するシステムとなっており、招聘するか否かは教員個人または、学部の意向次第となっている。加えて客員教員に提供する宿舎の問題がある。客員教員(招聘A)および海外協定大学との協定による受け入れで、宿舎の定員がほぼ埋まってしまうという現状がある。国際交流基金等の外部資金または個人の資金によって来学する研究者についても、柔軟に受け入れることが可能な住居提供システムの検討・構築が必要となっている。

学内第三者評価

指標とする数値データでは順調に進んでいると認められる。宿舎の確保などについては、「検討している」「開始した」というだけの記述にとどまっており、自己点検・評価の目的からして十分とはいえ、目的なども記述することが望ましい。全学の国際交流、教育のリーダーシップをとるセンターとして、スタッフの業務量の問題なども検討し、記述することが期待される。

なお、学外委員からは以下の意見があった。
国際交流協定締結機関数は順調に伸びており、今後は具体的な交流事業の中身の検討にとりかかっていく段階にきている。
外国人留学生数（正規・交換）は順調に増加してきているが、全体の学生数に比べればやや停滞気味である。学生の派遣は長期派遣がのびている。しかし全体を経年でみればかならずしも満足できる水準に達しているとはいえないので、さらなる努力が望まれる。
人的国際学術研究交流は往復とも停滞気味である。客員教員制度や宿舎が問題になっているのか具体的に記述することが望まれる。
オーストラリアでの英語研修プログラムの準備は進んでいると認められる。「留学生ウィーク」は今後の発展の基盤づくりができたと考えられる。学内広報により、これら大学側の努力を学生にどう伝達し、関心をもたせていくかが鍵となる。
センターの存在意義は認められてきているようなので、関学の国際ブランド・イメージの確立や各学部・研究科の国際交流事業をどう総合調整していくのかが次の課題である。留学生比率や受け入れ教員数あるいはTOEFL到達度など全学共通の数値目標設定などがセンターでできるようになることが期待される。